

生真面目な滑稽

高橋真紀子

お引越スミレは移植鏝に載り
大根を地球と奪ひあつてゐる
みづからを死体遺棄して油蟬

私の俳句の師匠、八木健会長の句から特に好きなものを選んでみた。小さな命に向けられた愛しさや驚き、淋しさに思わず心が動かされる滑稽句だ。俳句を始めたばかりの頃、師匠はよくおっしゃった。「生き物を慈しむ目を持ちなさい」と。

「自然をどれだけ見得するか、そこに彼の人格が現われ彼の境涯が成り立つ」

こちらは、自由律の俳人、種田山頭火の言葉だが、言わんとするところは師匠と同じだろう。

この旅、果もない旅のつくつくぼうし
笠にとんぼをとまらせてあるく
酔うてこほろぎと寝てゐたよ
ふくろうはふくろうで私は私でねむれない

旅に生きた山頭火の俳句には、度々生き物が登場する。そして淋しさと可笑しさを醸し出す。

「(蚊や蠅は)打とうとする手を感じていちはやく逃げる。いのち短かい虫、死を前にして一生懸命なのだ」「蟻が行儀正しく最後の御奉公にいそしんでいる姿は、ときどき机の上を歩きまわったり寝床を襲うたりして困るけれど、それは私に反省と勤労を教えてくれる」

随筆「草と虫とそして」の中で、山頭火は温かく謙虚に小さな命への思いを語っている。

くだんの山頭火や師匠の句の滑稽味は、目線が生き物と同じ高さにあることから生まれる。このような感性は、他に、金子みすゞの詩や、アンパンマンの作者として知られる、やなせたかし氏作詞の「手のひらを太陽に」(ミミズだってオケラだってアメンボだってみんなみんな生きているんだ友だちなんだ)などにも見られ、広く人々の共感を得てきた。少しオーバーかもしれないが、仏教の「草木国土悉皆成仏」(草木や国土までもが、みな成仏できる)に通じる日本人独特の自然感だと私は思っている。だから、俳句にもよく合うのだ。

山頭火の人生に少し触れておく。実家は山口県の大地主だったが不幸が続いた。九歳の時に母が自殺。後に家は没落し弟も自殺する。学業優秀だった山頭火は、早稲田大学文学科に進むが神経衰弱で退学。俳句で頭角を表す一方、酒に女にと荒れ、妻子と別れて出家、行乞流転の旅に出た。無茶苦茶な生き様だが次々と句友たちが助けになり、別れた妻も頼りになったようだ。その滑稽なまでにピュアな人柄ゆえだろうか。

参考文献「山頭火句集」(ちくま文庫)「山頭火随筆集」(講談社文芸文庫)
「新潮日本文学アルバム 種田山頭火」など